

# 教科書について

「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて

考えてみませんか?

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、

どんな「付き合い方」をしましたか。

長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、試行錯誤を重ねた現場の教師たちから『できる日本語』という新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと共有していきたいと思います。

第 2 回

## どんな教科書と 付き合っていますか?

### 教科書をクリティカルに見る

皆さんは、初級教科書を使っていて、「なんとなく使いにくい」「なぜか学習者の発話が伸びない」などと思ったことはありませんか。今回は、「教科書を見る目」を養うにはどうしたらよいか、を考えていきます。

初級の総合教科書では「文型積み上げ式」のものが多く見られます。例えば「て形」導入後、「～てください・～ています・～てもいいですか・～てはいけません……」と、「て形」を使った文型が次々に出てきます。これは、日本語を体系的に学ぶために、「はじめに文型ありき」の考え方で教科書ができています。そのため、「まずは形をしっかりと覚える」ことが重視され、場面・状況が教科書に明示されていない場合が多いようです。

もちろん、こうした「文型積み上げ式」であっても、教師が一つひとつ、場面・文脈を考え、「誰と誰の会話で、どんなときに使うのか」ということを考慮して授業を展開していけば、問題はありません。しかし、現実にはそうした配慮が十分でないことから、運用力・応用力が付かないなど、さまざまな問題が起こっています。教科書の威力は大きく、教師は教科書に書かれていることに、つつい左右

されてしまいます。だからこそ教科書をクリティカルに見ることが大切なのです。

ここで、「～ことができます」という文型について考えてみましょう。この文型にはいくつかの意味がありますが、初級教科書では同時に出てくることが多いようです。

①もう日本語で電話をかけることができますか。

②教室で食事をすることはできません。

この2つの例文を見ると、①は「その人に能力が備わっている」、②は「ある状況の下で実現することが可能」と、「～ことができる」の持つ意味が異なります。それが一緒に取り上げられるのでは、学習者はなかなか真の運用能力を身に付けられません。

### シラバス融合の試み

ちょっとシラバス(学習項目・内容)について考えてみましょう。最も一般的なのが文法シラバス。文型や文法項目など言語の構造の観点から分析し、構成されているシラバスで、「文型積み上げ式教科書」はこの考え方に基づいて作られています。他に「頼む・断る・誘う」など機能を中心にした機能シラバス、「病院・レストラン・買い物」など場面を中心にした場面シラバス、「趣味・家族・仕事」な

どトピックを中心にしたトピックシラバスなどがあります。

これらのシラバスについて、教育現場ではこんな議論が聞かれます。

A先生：文法シラバスは知識偏重になりがちで、学習者が実際の場面で使える日本語を学べないんですよ。

B先生：でも、機能シラバスだと、その機能については運用力が付くけれど、体系的な学習につながりにくくて……。

C先生：場面シラバスは、すぐに使えていいけれど、他の場面にうまく結び付けられないことが多いです……。

となると、1つの方法として考えられるのが「シラバスの融合」です。「場面シラバス・トピックシラバス・文法シラバスの融合」を目指したことが、『できる日本語』という新しい教科書につながりました。

例えば、「形が同じだから」という理由で、意味の異なる「～ことができます」を同じ課で学ぶということはありません。まずは、場面・状況を考えていきます。9課では「掲示板を見ながら、参加するイベントについて話し合う」場面で、「私は上手に字を書くことができませんから、書道を習いたいです」という①の用法を学びます。

次に10課の「施設にどんなサービスがあるかを聞く」場面で、「ここで観覧車のチケットを買うことができますか」という発話が出てきます。

皆さん、「はじめに文型ありき」という発想を変えて、「できること」重視で、既存の初級教科書をクリティカルにチェックしてみませんか。きっと、さまざまなことが見えてくるでしょう。それを仲間と一緒に話し合ってみると、また新たな気付きが生まれます。こうした「教科書チェック」は、実は、授業力アップにもつながっていくのです。

## 教科書をクリティカルに見てみると

**立** ち止まって教科書を見詰め直すと、いろいろなことが見えてきます。ある初級教科書に、次のような会話例があります。

A：失礼ですが、お名前は？

B：ラットです。

A：ナットさんですか。

B：いいえ。ラットです。

この会話例には、場面・状況、AとBの関係が示されていません。そのため、名前がわからないときには「失礼ですが、お名前は？」と聞くのだと覚えてしまう学習者も出てきます。初級1課であることを考えると、「あのう、すみません。お名前は？」としたほうが、汎用性もあり、自然です。「教科書はお手本で正しい」という思い込みがあると、疑いを持つことなく、教科書で教えてしまう恐れがあります。思い込みを捨て、クリティカルに教科書を見る習慣を身に付けましょう。



### 嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。  
外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。  
現在は、日本語教育業界を牽引するベテランの一人として学習者への日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。  
著書に『目指せ、日本語教師力アップ！  
—— OPIでいきいき授業』（ひつじ書房）  
『キムチと味噌汁—韓国、異文化交流のススメ』（教育評論社）  
『ワイワイガヤガヤ 教師の目、留学生の声 —— 異文化交流の現場から』（教育評論社）など多数。  
『できる日本語』（アルク）監修

- 連載ラインナップ
- 第1回 教科書を考えるって面白い！
  - 第3回 タスク先行型授業にチャレンジ！
  - 第4回 「わかる」から「できる」へ
  - 第5回 漢字学習も「できること」重視！
  - 第6回 「プロフィジェンシー」で、教師力アップ！ 1
  - 第7回 「プロフィジェンシー」で、教師力アップ！ 2
  - 第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1
  - 第9回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 2
  - 第10回 自律的な学びを支えるモノ
  - 第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは？
  - 第12回 対話で新たな日本語教師人生を！